

人生ハンド仏句

第19号

H. 15. 10. 1
(毎月1日発行)

編集・発行
玉蓮山
真成寺
編集部

大聖人と出会う儀式

「お会式」(一)

今年も七二二回目のお会式が巡ってきます。過日(九月十三・十四・十五日)二七名を引率して身延山並びに七面山の参拝をして参りました。日蓮大聖人様の御廟(お墓)、その横にあるご草庵跡を案内してきました。

弘安四年十一月、十間四面の草庵が新築され、お弟子方やご信者は、これで大聖人様にも風雪のわずらいがなくお住いいただけると、ほっと胸をなで下ろしたのもつかの間、やはりそれまでの法華経を弘める故の数々のご苦労と山中での厳しいご生活は、確実にご法体に暗い陰を落としていたのでしょうか。とてもこのお身体では身延山の厳しい冬を越すことは無理ではないかと、心配された身延の領主、波

木井実長公(はきいさねながこう)はじめ

おそばに仕えているお弟子やご信者の強い進めもあつて大聖人はついにお山を下りて、常陸の湯へ湯治療に行かれることを決心されました。そして弘安五年九月八日、波木井公のお心尽くしの名馬『栗鹿毛の馬』に召され給い、日朗、日興上人等の高弟を従え、こよなく愛された身延山をお出ましになられました。もう二度と生きて眺めることのない身延の山々を万感の思いを胸に幾度となく振り返つてご覧に成つたことと思われます。

かくして、富士山北麓を回る甲州路を通つて、九月十八日にご信者である池上宗仲公の館にお着きになりました。翌十九日さっそく身延の波木井公へ感謝のお手紙を出されておりますが、この手紙は日興上人が代筆され「日蓮」のご署名と書き判すらも「所労のあいだ、判形をくわえず」とご自身でお書きになれない程、お

身体が衰弱していたものと拝察されます。九月二十五日、少しお身体がよく成られると近在から弟子信者を参集させ、弟子達に左右より助けられつつ書院床の間の柱にお寄り掛かりに成られ、今生最後の御説法として「立正安国論」のご講義を始められました。おそらくこの御説法の中で「二陣三陣つづけよかし」と厳訓され、翌月の十三日、大地が振動する時が最期涅槃に入るであろう事を大聖人おん自らおごそかに告げられたことと拝されます。来集の人々は、もう二度とこのようなご講義を拝聴する事が出来ないのだとただ合掌し涙するばかりではなかつたでしょうか。

(紙面の都合上このつづきは、十一月号へ。
お楽しみに！)

住職 谷川寛俊

べっぴんも笑顔わすれりや 5割引